

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25580014

研究課題名(和文)近代化における土俗宗教とナショナリズムの相関関係に関する日韓比較研究

研究課題名(英文) The Japan-South Korea comparative study about the correlation of the ground worldly religion in modernization, and nationalism

研究代表者

朴 鍾祐 (PARK, JONGWOO)

神戸大学・国際教育総合センター・教授

研究者番号：60304078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀半ば以降の東アジアの近代化の過程は、国際関係の中で新しい近代国家を形成する。その近代国家は、西洋の衝撃から自国を守ろうとする考え方は自国中心主義を作り出す。本研究は、このような自国中心主義が構築される時に何を根拠とするのかを模索するものである。とりわけそれぞれ固有の土着の宗教が近代国家の精神的支柱としてどのような役割を果たしていたのか。その問題提議を中心に日本と韓国の近代のナショナリズム構築にどのような相違を模索したが、両国の時代背景や宗教的土壌の相違によって大きな隔たりがあったことが明確になった。

研究成果の概要(英文)：The process of the modernization of the East Asia after the mid-19th century forms a new modern nation in international relations. In the modern nation, the way of thinking that is going to protect an own country from a Western shock creates the principle of own country center. I explore what this study assumes grounds when the principle of such own country center is built. What kind of role did inherent native religion play as a mental prop of the modern nation each among other things? It explored what kind of difference for Japan and the nationalism construction of modern times in Korea mainly on the problem proposal, but it became clear that there was very much patient difference by difference in background and religious soil in the times of the two countries.

研究分野：日本思想史

キーワード：近代国家 自国中心主義 土俗性 草莽運動 平田国学 東学運動 土着宗教 天道教

1. 研究開始当初の背景

この研究の背景になる点においては、
(1) 日本の場合は「尊皇攘夷」、朝鮮では「衛正斥邪」を標榜することは典型的例である。その思想的基盤の中には国学者たちの思想的武装は決して無関係ではなかった。江戸時代の思想的土壌は、ある意味儒学の呪縛から逃れることもできなかつたかもしれないが、それに屈することなく、新たな思想的軸を見出すエネルギーも多く含んでいたことも看過出来ない。本研究では近代の黎明期の思想史的土壌の中で「土俗」性が如何なる有機的作用をもたらしたかを検証し、解明を試みたい。とりわけ民衆的な要素が近代国家の概念の中にいかに収斂されていくのかに着目したい。日本の近代国家は、国家が上層的であり、表層的要素が色濃く表われるため、下層的にみられる「民衆」性や「土俗」性が国家に隠蔽される傾向があると思われる。

(2) 朝鮮半島においても同様、朝鮮王朝末、急激に朝鮮をめぐる情勢の変化は国の存亡の危機とともに朝鮮王朝を激しく渦巻いてしまう。その中で民衆の中の動きよりも国家的動きが先行してしまう。しかし激しく波立つ海原の水面下も決して見逃すには行かない。19世紀両国における「民衆宗教運動」とも呼ぶべき宗教的動きは、新たに大きな流れをつくりだし近代的国家の自国認識とも無関係ではなかった。この研究は「民衆」性や「土俗」性の視点から近代国家への道程を能動的に捉え、より近代国家の「自国認識」を立体的に究明しようとする点にある。

2 研究の目的

1) 幕末思想史の中で「土俗」的信仰の受容と変貌を突き止め、思想史の中で土俗性が如何に機能をしてきたのか、とりわけ自国認識への変貌の過程を明らかにすること。

2) の部分が日朝両国における近代国家の認識にどのような違いをもたらしたのかを比較しつつ究明すること。つまり近代国家形成の両国の異なる思想的枠組みを見出すこと。

3. 研究の方法

本研究は、方法論の統一、また同一視点を保つことが本研究に求められる重要なものと判断するため原則的に一人で行うものとする。その代わり3年間にわたり進めていきたい。

(1) 「土俗」的要素が思想史のうえで、どのように現れたのか、「土俗」的思想の形成の形態の明確に浮き彫りにする。

(2) 思想史的位置づけ。またその系図がどのように近代以降の思想体系に組み込まれていくのかを究明する

(3) 近代国家の形成の中にどのように変貌

を遂げたのかを明確にする

(4) この変貌が両国のナショナリズムそれぞれ特徴をもたらしたのかを比較検討を行う。研究の方法としては、文献による検証を行う。

4. 研究成果

研究成果としては以下の点に集約される。

(1) 研究成果俯瞰

今日のアジア諸国、とりわけ東アジアの国家形成においていわば「近代化」という言説は、各々のもつ意味は大きい。これらの言説に共通するものとして、「西洋」という他者とのかわりはこれらの諸相を探る上で重要である。本研究は、「西洋」の他者をめぐる18世紀末の日本朝鮮の両国の思想的土壌を探るものである。本研究を通して以下の点に注目することができた。

まず、朝鮮王朝の対応のあり方には三つのパターンがみられる。一つは「衛正斥邪論」の思想で、従来の道学思想を継承しながら、18世紀台頭してきた「西学」に対抗する理論武装を試みた。二つ目は、実学思想である。実学は後に開化思想として継承発展されていく。とくに18世紀著しく実学の中心思想として発展を成し遂げる「北学」思想は、朱子学の学者たちが西洋の文物を受け入れることに積極的であった。三つ目は、民衆の中に根づいた東学思想である。東学は儒・仏・仙三教合一を標榜している。が、朝鮮の側の一連の動きは、根底には儒学の理念に立脚したものが一つに特長であろう。しかし西洋に対する対立が両極に現れることであるが、先も述べたように「儒学」を中心とする「尊華」の思想を如何に取り込むかの問題は、もう一つの視点で見なければならぬ。つまり朝鮮の近代化へ向かう際の思想的交錯は、単に「自己」対「他者」の二極だけではなく、さらに複雑化された様相を呈するところがあると言えよう。それに加わり、学問の様相と政治的力関係が国内のみならず、国外の力関係まで及ぶものによって一層多極的検討を要することがわかった。

一方、日本の場合は、18世紀の前半と後半は、当然のことながら異なる展開は呈する。それは国学、とりわけ平田篤胤のように世界観のような全体の枠組みで日本を位置づける学問と、横井小楠や渡辺崋山などにみられる学者たちが、幕末の変革期でそれぞれの思想を浸透しながら具現化する様相をみることが出来る。その際、「西洋」という「他者」の存在をより積極的に捉えられる部分において、朝鮮の様相とはさらに異なる分部といえよう。

幕末期における思想の転換とともに、社会の既存の思想的基盤が培ってきたモノが新たな受容に如何に深く関わるか、さらにその思想が向いている政治的要素にも大きな影響

を受けることであることを確認できた。

(2) 朝鮮王朝から近代国家へ道程

朝鮮半島は、19世紀の後半以来、列強からの外圧、日本からの植民地支配への脅威から自国を守るうとする動きが強まり、どの時代に見られないもっとも思想的に激動の時期を迎える。民族の共同体の中で対外的危機の存亡から克服するための思想と運動が自ずと発生する。そこで二つの方向へ力学が働く。一つは政治的かつ外交的な側面から「衛正斥邪論」であり、もう一つは民衆の心の依り処となる宗教的側面から「東学思想」であった。名付けからして、「西学」つまり、洋学としての天主教に対抗する意識が明白に現れている。このような二つの軸を中心に、自国主義へ思想的土台を築き上げるのである。

(3) 新たな思想体系としての「東学」

東学の創始者である崔濟愚は、東学の教典である「東經大全」「龍潭遺詞」の中で、「輔国安民」「広濟蒼生」を掲げ、政治的側面と民衆への布教を両面からアプローチする。これが「反西学」「斥倭」「脱中華」に繋がる思想の確立を試みた。これは従来の中韓思想からの脱皮を意識するもので、中華思想を中心とする従来への価値観からの脱皮し自国中心主義を唱えたのである。ただし、「儒教」「仏教」「道教」など民衆に強く根付いている従来からの宗教的思想を融合させながら民衆への布教を強化した側面も否めない点においては純粋な土俗宗教であるかにはやや疑問が残る。しかしもっとも民衆的宗教観念に根付いたものである点や、国家的危機の中で、思想的、宗教的な精神的側面をもって構築しようとした運動は、近代化に現れた韓国の特徴として捉えることができる。東学運動はその後、宗教的活動よりは政治的局面に立たされることが多く、甲午農民戦争に現れるように、民衆の立場として反植民地支配への抵抗に傾くことが顕著に現れるようになる。その原動力として自国中心の思想としては「斥倭斥華斥洋」のイデオロギーの強化へ道を歩むことになる。その政治的運動の結果、民衆を巻き込む義兵活動、さらに「活貧党」のような精神的支柱になっていたのである。

(4) 日本の幕末期の宗教的重層

アジアにおける外圧からの自国中心主義への発想は、「尊皇攘夷」思想は、国学に影響を受けてその思想運動の拡大されることであるが、日本も外圧だけではなく、内政的政局の混沌さの中で、宗教的側面においてもかなり複雑さを増して行く。平田国学が神道の神学化、思想化に大いなる原動力になった点やその運動が民衆に浸透して行った側面は19世紀の思想的運動としては大きなうねりを生み出した。しかし神道という大きな民族宗教の傘下にあったとしても、国家神道、

教派神道、さらに神仏習合、神儒集合といった複雑に融合していく新たな創唱宗教に至るまで実に多層的、多面的性格が、民衆をめぐって新たに作られて行くことが如実に現れるのであった。日本の近代化における宗教の諸現象と政治的動きを一致させることの難しさがあるが、国家的自国主義においてならず、民衆の土俗信仰が反映されるどうかを検証する作業も困難を極めることが本研究を通してよくわかった。

(5) 日韓における自国中心主義の研究

同じ19世紀という時代の背景の中で、芽生えてくる自国中心主義は、自己防衛論という本質的な面においては一致するものの、外圧の対象、内部の政治的状況、また次の向かうとする国体によって著しく異なる点があること。さらに、国家のイデオロギーがその拠り所として民衆の根強い信仰を求める要素があるが、逆にその国家の重圧から逃れるために民衆が依り求める土俗宗教はかならず、国家主義に跳ね返ることがないこともある。

(6) 今後の研究方向性の模索

今後の研究課題の展開する方向について新たな方向性を見出したのも成果の一つである。

19世紀の国内外の時勢から宗教の動きを捉えることに合わせて、従来からの土着宗教がその後、どのような変遷を成し遂げていったのかを追跡する研究も視野に入れる。

19世紀に生まれた民衆宗教、土俗宗教がその後、20世紀にはどのような変遷をなしているのか、それが19世紀の宗教的土壌を知るうえで新たな視座を提示することを今後の研究に活かして行く。

時代的研究の必要性

今回の研究を進めていく間は、東アジアの国家間においては政治的外交的な面な対立が顕著に現れた時期であった。宗教的に側面にこそみることではできなかったが、自国中心にナショナリズムの動きがますます活発になってきた。21世紀グローバル時代において様々なモノ、ヒトが自由に行き来し増える一方、国家間、民族間の対立、争いの激しさを増している。その根底にこのような自国優越主義が蔓延している点からも、今後このようなナショナリズムの解明する研究が必要になっている。その中で、さらにこの研究をいまの時代に活かせることに意義があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

朴 鍾祐、「民衆宗教としての東学運動の思想的発展に関わる一考察」安東大学校人文学会
2015,6,20 安東大学校 (韓国)

朴 鍾祐、「多文化社会と宗教との関連性」
建国大学校ディアスポラ研究会 2017.3.25
建国大学校 (韓国)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

社会貢献として、地域の団体での講演、集会での話題提供など数回行ってきた。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朴 鍾祐 (JONGWOO, PARK)
神戸大学・国際教育総合センター・教授
研究者番号：60304078

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：